
静寂の空に

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
静寂の空に

【Nコード】
N0820S

【作者名】
みえさん。

【あらすじ】
少年、久住洋一の組織での役割は。

「リボルバーにサイレンサーつけようとしたバカってお前の事か？」
男が声をかけると、小柄な少年はむっとする素振りも見せず肩をすくめた。

「銃を持つのは初めてだったんです」

「ん？　じゃあ今までお前どうやって切り抜けて来たんだ？」

「これで」

少年は小さく笑ってナイフを取り出す。

「ナイフ？　じゃあお前があの『バタフライ』か」

「そんなに華麗でも無いですけど……」

少年は無邪気に笑んだ。

反政府組織「黄金の翼」は本人達でも把握できないほど巨大化し、組織の中で一度も顔を合わせた事のない者というのも珍しい話ではなかった。しかし組織の中の実力者の異名くらい知れ渡っている。バタフライはナイフを扱う姿がまるで蝶が舞うようであったためにそう呼ばれていた。華奢で頼りなく見えても彼は組織の中で一目置かれる存在だった。

バタフライは右手を差し出す。

「初めまして、ですよね？　『ピース』」

「俺のこと知っているのか？」

「噂くらいですけど」

ピースは愛用の銃が『ピースメーカー』という理由でそう呼ばれている。リボルバーを扱わせれば右に出る者はいない。

彼はバタフライの手を握った。

「よろしくな」

「こちらこそ」

ピースはバタフライの横に腰を下ろした。

「それでお前、ナイフのプロがどうして銃を扱う気になったんだ？」

「その方が便利じゃないですか」

言って彼は声を潜める。

「……近々この辺で大きな作戦があるのは？」

「いいや」

「政府の大物を狙撃するんです。出来るなら僕も参加したかったんですが、リーダーに銃も扱えないなら駄目だって言われて……当然ですけど、悔しくて」

「なるほどなあ」

「でも、サイレンサーの用途すら分からないんじゃないやっぱりナイフで勝負していた方がいいですよね」

残念そうに笑うバタフライにピースは頷いた。

「よし、じゃあ俺がそれなりに撃てるように訓練してやろうか？」

「え？」

「他の奴に教わるよりいいと思うけどな。それとも、俺じゃ不服かい？」

少年は慌てて首を振る。

「とんでもない！ ピースに教えてもらえるなんて願ってもないことですよ！ でも、いいんですか？」

「いいに決まってるだろ？ 仲間じゃないか。その代わり、俺にもナイフのコツ教えてくれよな」

屈託のない笑みに、バタフライも微笑む。

「もちろんです」

「狙うときは出来るだけ水平にかまえるんだ。威力を殺さず、照準がずれることがない」

「殺す時は迷った方が負けです。仕留められるときに必ずやっておかないと後で後悔しますよ」

「リボルバーはシリンダーを握られている状態じゃ撃つことはできない。接近戦は十分注意が必要だ。接近戦じゃ照準が併せにくいからな。その点、ナイフの方が便利なのかもしれないな」

「ええ、接近戦ではずっとナイフの方が便利です。脇腹から斬りつけて心臓を狙うのが一番手っ取り早いやり方です。ナイフの種類によつて刺すか切るかわ変わってきます。このナイフの場合……」

「自動小銃の場合はカートリッジの交換は早めにやるんだ。戦場じゃどうせ消耗品だからな。もったいないなんて言つて命落としたら元も子も無いだろう？」

「そう言えば知っていますか？」

接近戦でのナイフの訓練を終えたあと、バタフライが呟いた。

「何を？」

「例の作戦、明後日だそうですよ」

「へえ」

「場所は×××、ひょっとしたらピースも作戦に参加することになるかもしれないね」

「俺は専門がこいつだから暗殺には向かないよ」

ピースは太股に吊つてある銃を叩いた。

少年は微笑む。

「そう、ですね」

そう言えば、と少年が真剣な表情で尋ねる。

「ピースはどうして反政府組織に？ 貴方の腕なら政府軍だって雇つたでしょう？」

「ん、まあ……な」

歯切れの悪い言葉を彼は返す。

「政府に入ったって良かったんだ。だがな、お前みたいな俺より年下の連中が人を殺して生きていく姿見てたら、こんなばかげたゲーム早く終わらせたくなくてな」

「僕みたいな？」

「ああ。……俺には弟がいたんだ。それが銃撃戦の流れ弾であっけなくあの世にいつちまってな。俺、銃しか能がねえバカだから、弟が何で死んだか分からないんだ。結局治安が悪いのは政府のせいだっていきついてな。そんなもんだよ」

バタフライは少し考え込んでから言う。

「……治安が悪いの、僕らのせいかもしれませんよ」
「うん？」

「僕らみたいなゲリラ組織があるから政府も躍起になってくるのかもしれない。でも、僕は……」

ナイフを抜いて静寂の空にかざした。

月明かりに照らされて人の血を吸って曇っているはずのナイフがまるで真新しい銀食器のナイフのように輝いて見えた。

それ以上の言葉は出なかった。

しかしそれだけで十分だった。

「……お前は弟にそっくりだよ」

ピースがほんの少しだけ笑って彼の肩を叩いた。

泣きそうな顔で少年は口元を歪めた。

「どうしたんだ？ バタフライ。暗い顔をして」

大がかりな作戦があるという噂はもう、「黄金の翼」の中に知れ渡っていた。むろん情報の漏洩を防ぐために具体的な日時は知る者は少なかった。

バタフライの情報で言えば作戦行動は明日と言うことになっていた。

彼の表情はまるで緊張しているかのようにだった。

「……外に情報が漏れたんです」

「何だって？」

「どうやら誰かが情報を漏らしたようなんです」

ピースは険しい顔をした。

「じゃあ、内通者が？ 上層部の方か？」

「……」

バタフライは小さく首を振った。

断言出来ないとも言つかのように。

「それじゃあ作戦は中止なのか？」

「いいえ」

「？ だって情報が漏れたんだろう？」

「ええ、そうです。でも、漏れた情報は正しいものではありませんでした」

「！」

理解すると同時にピース手が太股に伸びた。

しかし彼が銃を抜くよりも早く、少年の握ったナイフがピースのど元に突きつけられていた。

「言ったはずです。接近戦ならナイフの方が早いって」

「お前、最初から俺を疑って近付いたのか？ 銃が出来ないふりをして……」

バタフライは悲しそうに首を振る。

「銃が出来ないのは本当です。始めに疑いを持ったのは僕でなくリーダーでした。バタフライのもう一つの意味知っています？」

「……」

「‘移り気’です。組織の中の移り気を、……裏切り者を処分するのが僕の役目です」

首をかしげて、悲しそうに彼は笑った。

「みんな僕の外見に騙されて油断するんです。……でも、信じてくれますか？ 僕は貴方のこと尊敬していたんですよ。残念です」

「俺もお前のことは嫌いじゃなかった……本当に残念だよ」
耳を劈くような鋭い音でピースメーカーが火を噴いた。

「！」

天井に下がった証明が音を立て割れ、破片が二人の上に降った。
一瞬の間に陥った暗闇に、バタフライは危険を察知し、後ろにと
びすさった。立て続けに二発の銃声。

「……殺れるときに殺るんだろ？ バタフライ」

「そうでしたね、僕が甘かったようです」

暗がり、何も見えて来なかったが、バタフライは頬に鋭利なも
ので斬りつけられたような痛みを覚えた。幸いかすった程度のも
のだった。

「なぜ、貴方のような人がこんなことを？」

「金だよ。他に理由なんざねえよ」

「この国を立て直すんじゃないかなかったですか？」

「そんなもん、俺には関係ねえよ。どっちにしたって俺は儲けられ
るんだ」

「……」

その言葉は本気ではない気がした。

「止めにしませんか、ピース。どちらにしても貴方はこの組織では
生きられません」

パンと遠くで火が噴いたのが見えた。

距離は分かっていたために避けるのは簡単だった。しかしバタフ
ライは避けずに空中をナイフで薙いだ。

済んだ音を立てて、銃弾が火花を散らして跳ね返った。

「ここを離れて、静かなところで暮らすのをすすめます」

暗に見逃すつもりがあるのだというバタフライの言葉をピースは
笑う。

「冗談。俺が隠居なんか出来るタマじゃねえことくらい知っている
だろう？」

一発の銃声のと、床にバラバラと弾が落ちる音がした。

「……そうですね」

残念です、とでも言いたげな彼の声はいつになく静かだった。強く床を蹴ってバタフライはピースに向かって走った。

「バカヤロウが、撃つぞ」

彼が言つのと、ハンマーが下がる音がするのとほぼ同時だった。

ドン、と鈍い音が響いて暗がりの中で一つの影が床に崩れ落ちた。

どちらかによってランプに火がつけられ、ほの暗い部屋の中に浮かんだのは血だらけのバタフライの姿だった。

肩で息をする少年の手には血まみれのナイフがしっかりと握られている。

彼には頬以外に傷はない。……その血は全て、ピースのものだった。

「シリンダーを握っていたら撃てないって言ったの……貴方じゃないですか」

ピースは答えなかった。

虚ろな瞳で天井を見上げる彼の両手にはピースメーカーがしっかりとにぎられていた。真っ直ぐな導線を描くように天井に向けられている。ハンマーを降ろしトリガーを握っている左手は弱く、シリンダーをつかんでいる右手は強く力が込められていた。

頸動脈を切断されて真っ赤な溜まりの中に横たわって、彼は静寂の空をじっと見つめ続けていた。

ずっと……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0820s/>

静寂の空に

2011年3月31日15時25分発行